

漁海況予報関係事業

(新漁業管理制度推進情報提供事業)

(抄 録)

佐藤 晋一・仲村 俊毅・大川 光則
黄金崎 栄一・高橋 進吾・小向 貴志

漁 況

平成10年の漁況の特徴は全県的なスルメイカの不調であった。各海域とも1990年以降の最低を記録した。マイワシも八戸で1985年以降最低水準となるなど、平館及び日本海側でも不調となった。マサバは八戸で前年並みとなったものの平館では前年の10分の1以下、日本海側でも1985年以降最低の水準となった。

日本海のアブラツノザメは近年減少傾向にあるが、平成10年はさらに少なく、1985年以降の最低を記録した。日本海北部から津軽海峡にかけてのヤリイカ漁は前年を大きく下回り、低い水準にあった。

日本海のウスメバルは引き続き好調で、前年に次ぐ高水準となった。日本海の底建網等で漁獲されるブリ、タイも前年には及ばないものの高水準となった。日本海南部のヤリイカは前年を大きく上回って高水準となった。

沿岸域におけるスルメイカー一本釣漁は、日本海側では前年の43%、津軽海峡側で30%、太平洋側では25%程度と前年を大きく下回り、過去8年間平均値と比較しても55~28%と極端な不漁となった。海域別にみると日本海側では前年より1月早い6月にピークをむかえ、1,402トンの水揚げがみられた。津軽海峡側では前年同様の8月にピークをむかえたものの水揚量は426トンと前年の30%にとどまった。太平洋側の白糖でも前年と同じ7月にピークをむかえたものの水揚量は203トンと前年の29%にとどまった。また、八戸では前年より1月早い8月に1,140トンのピークをむかえた。

日本海の定置網・底建網で漁獲されるマダイは前年より約4トン多い92トンとなり、1985年以降では1992年、96年に次いで多い漁獲量となった。

主として定置網で漁獲される日本海のブリは前年より100トン少ない320トンが水揚げされ、比較的高水準を維持した。

太平洋のまき網で漁獲されるマサバは5万3千トンとなり、漁獲が上向いた昨年に匹敵する水揚げとなった。日本海のマサバは0.5トンで1985年以降最低の皆無状態、平館でも昨年の10分の1以下の低水準となった。

資源減少が危惧されている太平洋のまき網によるマイワシ漁も1,077トンと、1985年以降最低だった前年並みとなった。日本海の定置網で漁獲されるマイワシも1.6トンと引き続き低水準であった。

海況

平成10年度の青森県沿岸の海況は、日本海沿岸定線観測・太平洋沖合定線観測結果から求めた対馬暖流（日本海）・津軽暖流（太平洋）の流勢指標を平年と比較することで表現すると次のとおりである。なお、日本海及び太平洋の観測定線図を図1に、流勢指標の暖流幅、津軽暖流張り出し位置、水塊深度についてはその模式図を図2及び図3に示した。また、平年比較の基準については章末「参考」に示した。

1 日本海（観測月2～6月、8～12月、各月1回）

平成10年の青森県日本海沖合における対馬暖流域の水温は3月及び5～6月に高め、8～9月低め、10～11月高め、12月は低めと2カ月ごとに変動しているように思われた。対馬暖流の勢力は定線観測結果によると3月かなり強め、5～6月やや強め、8月やや弱め、12月にはかなり弱めに推移した。

表面水温は3月から11月まで高め～平年並みで、12月にはかなり低めとなった。50m層水温は3月から6月まではかなり高め～やや高め、8～9月かなり低め～やや低め、10～11月はやや高め～かなり高め、12月はやや低めであった。100m層水温は3月はかなり高め、4月やや低め、5月やや高め、8～9月及び12月はかなり低めに経過した。

100m 5℃等温線の岸からの位置で対馬暖流の流幅をみると舳作崎線では3月やや広め、4月かなり狭め、11月やや狭め、12月にははなはだ狭めとなった。5～10月は平年並みであった。また、十三線では3～4月にはかなり広め、5月ははなはだ狭め、6月ははなはだ広め、8～9月やや狭め、10月やや広め、12月やや狭めと大きく変動した。

水塊深度を7℃等温線の最深度でみると4月はやや浅め、8月かなり浅めで、12月にははなはだ浅めとなっていた。

対馬暖流の北上流量を水深300m層を無流面とした地衡流量でみると5月はかなり多めだったが、6月にはやや少なめであった。それ以外は平年並みとなっていた。

2 太平洋（観測月 3月、6月、9月、12月、各月1回）

平成10年の青森県太平洋沖合における津軽暖流の勢力は3月にかなり弱く、6月は平年並、9月はやや弱めに推移した。

表面水温は9月にやや低めの他は平年並であった。50m層水温は3月にははなはだ低め、9月にかなり低めであった。100m層水温は3月にかなり低めであったが、6月にはやや高め、12月はやや低めとなった。

津軽暖流の深さを尻屋崎線における7℃等温線の最深度でみると、3月には最高水温が6℃台だったため水塊深度としてはとらえられなかった。これは前年及び前々年と同様の結果となった。6月にはやや浅めで、9月には平年並みとなった。

津軽暖流の張り出し位置を尻屋崎線における100m 5℃以上塩分33.7psu以上の東端位置でみると3月ははなはだ西偏（弱め）、6月もやや西偏していた。

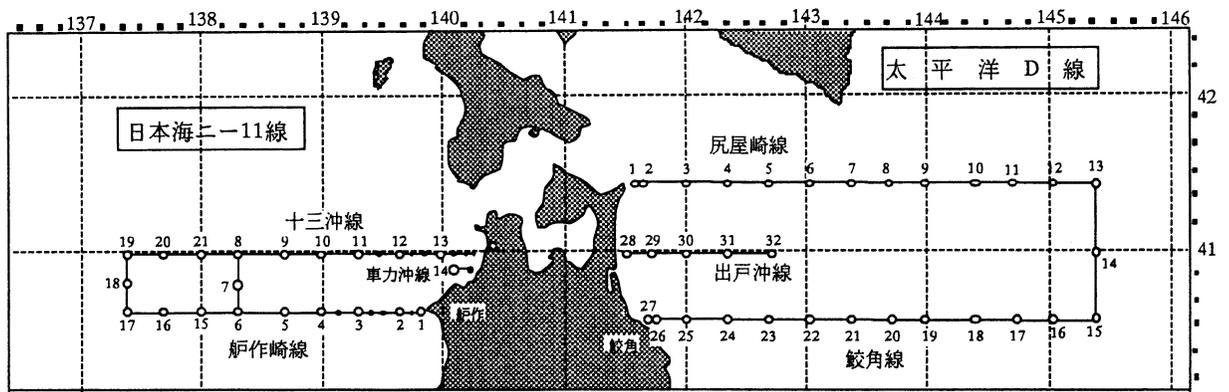


図1 太平洋及び日本海の観測定線

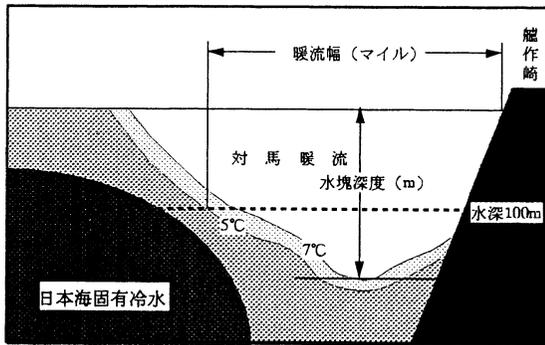


図2 船作崎鉛直断面模式図

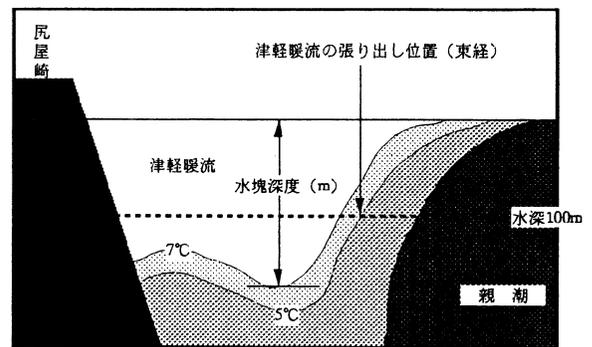


図3 尻屋崎鉛直断面模式図

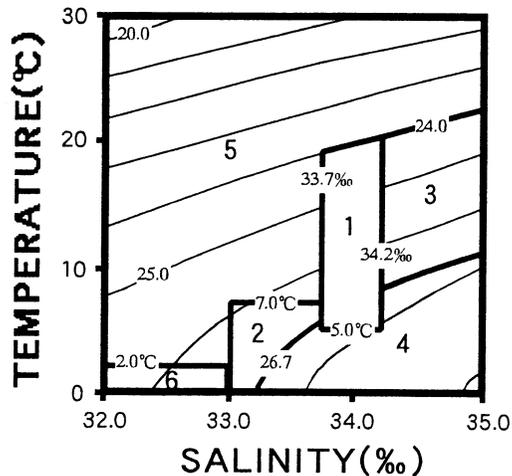


図4 花輪、三寺 (1986年) 等の水塊分類法

津軽暖流水は塩分33.7~34.2psu、水温5°C以上、密度 (σ_t) 24.0以下で規定される。

1. 津軽暖流水
2. 親潮系水
3. 黒潮系暖水
4. 底層冷水
5. 表層水
6. 沿岸親潮系水

参考 平年比較の度合い (気象庁の海面水温偏差の階級区分を参考にした)

表現	偏差比 (標準偏差に対する割合)		
はなはだ高い	+200%以上		(およそ44年に1回の発生に相当)
かなり高い	+130%以上	+200%未満	(およそ14年に1回の発生に相当)
やや高い	+60%以上	+130%未満	(およそ6年に1回の発生に相当)
平年並	-60%以上	+60%未満	(およそ2年に1回の発生に相当)
やや低い	-130%以上	-60%未満	(およそ6年に1回の発生に相当)
かなり低い	-200%以上	-130%未満	(およそ14年に1回の発生に相当)
はなはだ低い		-200%未満	(およそ44年に1回の発生に相当)